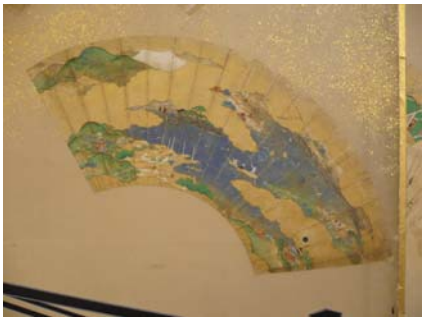
2011年3月16日

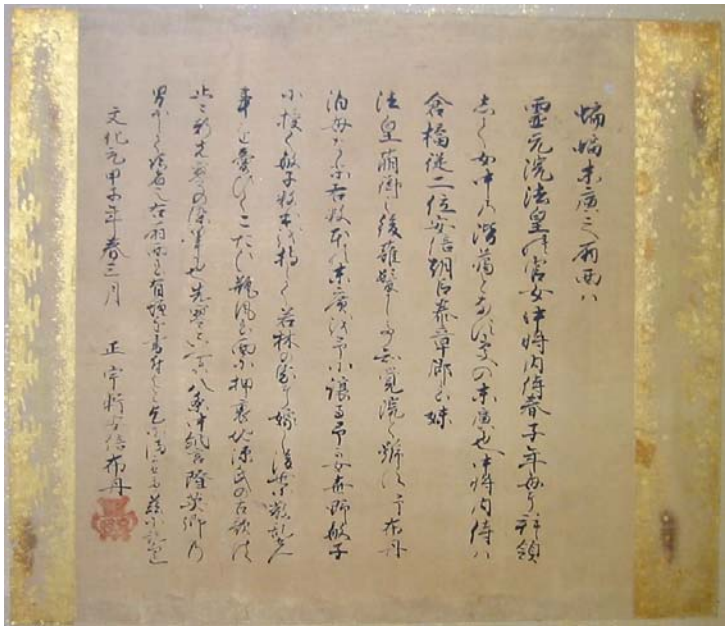
2010年度卒業記念展示：源氏物語扇面貼交屏風（６曲１双）



濃彩の細やかな源氏絵と金銀泥芦手風下絵の詞書各１５面、金揉箔散らし地の余白には立蔀が描かれ、屏風に気品と奥行きとを添えています。

まず見ていただきたいのは、実際に扇として使われたものを貼り込んでいること。源氏絵屏風の作例はけっして少なくはありませんし、扇面型源氏絵もめずらしくはないでしょう。しかし、実用に供された扇が残ることは非常に稀なのです。さらに、とても興味深いその制作事情。左隻の由緒書とその他の資料をつきあわせますと、おおよそ次のようなことがわかります。

江戸時代中期の宮廷に、中将内侍あるいは中将局と呼ばれた女房がおりました。実名は春子。家禄１５０石、陰陽道を専らとする安倍泰章（１６８７～１７５４）の妹ですから、あまり高い家柄の出ではありません。しかし英邁な君主として知られる霊元天皇（１６５４～１７３２）に愛され、男宮を生みます。この宮は、後に実相院門跡となり峯宮とも顕明院宮とも呼ばれましたが、正徳３年（１７１３）わずか５才で亡くなっています。中将内侍は、おそらく霊元天皇が上皇となってからお側に仕えたのでしょう。親子ほど年齢の差があったと思われます。天皇は、出自の低い寵愛の女房に毎年源氏絵の扇を賜り、彼女の弱い地位の支えとしたようです。その扇こそ、私たちが今目にしているものにほかなりません。このような時期・場所・下命者など制作事情が具体的にわかる源氏絵屏風は、まったく希有の例なのです。



享保１７年霊元天皇が崩御されますと、中将内侍春子は出家して尼となり、思い出の扇を甥（号、布丹）に譲ります。布丹はさらにわがむすめへ贈ろうとして、散佚を恐れ屏風に仕立てました。こうして３００年近い時間を超え、江戸時代宮廷の文華が確かに伝えられることとなったのです。

［げんじ ものがたり せんめん はりまぜ びょうぶ　文化元年(1804)制作］